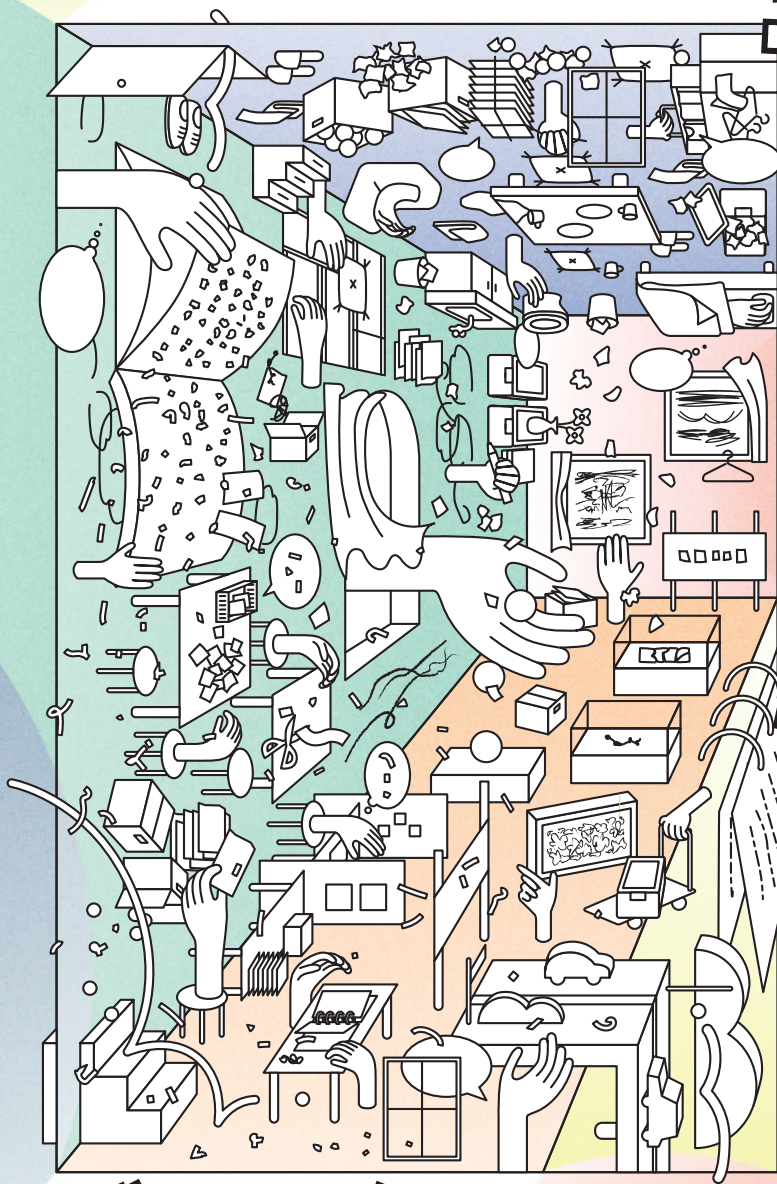


新潟アール・ブリュット展

もの・と・暮らし モノ・リ・ノム



ガイドブック

「ものと語り」とは

アール・ブリュットとは広義に、文化的な伝統や流行、教育などにとらわれずに、独自の発想と方法により制作した作品とされています。鑑賞されることを目的としていないそれらの作品は、多くの場合、作者ではなく周りの人によって見出され、紹介されてきました。そこには「もの」に対する創造的な観点で「語り」も生まれています。

「新しい言語を作り出すこと、それはまさに芸術家の創意のありかです。」アール・ブリュットを提唱した画家ジャン・デュビュッフエは、表現する動機をそのように言いました。「言語」という観点に立ったとき、「作品」は誰との間で使われ、どのようなやりとりを生み出しているのでしょうか。

角地智史 / アートディレクター





■ものと語りがある場所	4	岡田清和	20
■作家紹介		堀井銀次	21
五井雅人	6	坂上ウェルネス工房	22
遠藤哲朗	7	HAHAHANO.LABO	24
斎藤英雄	8	Oosusu!	26
井口直人	9	MOMO+佐藤葉月	28
宮下和子	10	情報資格試験	30
本間美喜子	11	七桃団仔	32
西須奈津子	12	しゅんすけ	34
大橋加奈	13	心は生きる 心と生きる	36
今井清和	14	■展覧会概要	38
藤原純治	15	■奥付	39
Y・K	16		

アール・ブリュットを定式化すること、もちろんそんなことはしたくありません。あるものを定義づけることは、それを酷く傷めることです。ほとんど殺してしまうに近い。物事には連続性というものがあるのです。説明はもう十分です！説明は、意味を窒息させる。アール・ブリュットとは、アール・ブリュットであり、皆がよく理解しています。全然よくないって？もちろんでしょう、だからこそ、ここから進んでみようと思う訳です。このカイエ（冊子）があるのは、そのためなのです。

ジャン・デュビュッフエ

初期のアール・ブリュット構想について
『fascicule de l'art brut 第1号』より抜粋

ものと語りがある場所

新潟アール・ブリュット展“ものと語り”とは、いわゆる「美術作品」とは異なる性質を持つ障害者のプライベートな創作物と、それに対する家族や福祉施設職員など周囲の人々の語りを一時的に結びつけ、その総体を作品として鑑賞する試みです。展覧会を人々とともに作り上げるプロセスを通じて、プライベートな創作物がパブリックな場に移行していくための、新たな捉え方や語り方の共創を目指します。福祉施設とも美術館とも異なる立場から、障害者芸術文化活動支援センターとしての展覧会のあり方を探ります。

初めに、本展では“ものと語り”を大きく三つのタイプに分け、作品の紹介を行なっていきます。



A：「福祉」「アール・ブリュット」



“自身の奥底からテーマや表現方法を引き出し、原初的で究極の創造を行う人々であり、スタイルを主張したり個性を誇示したり、栄誉を求めたりすることはない。”アール・ブリュットの作者像は、そのように語られてきました。そこでは、自己完結的な姿が強調され、他者との相互性が取り上げられることはほとんどありません。それでは、こうしたアール・ブリュットがなぜ福祉と結びつき、各地で展覧会として紹介されるようになったのでしょうか。そこには、どのような期待や背景があるのでしょうか。新潟県においても、福祉施設が企画するアール・ブリュット展が継続的に開催されています。本展 A では、福祉施設職員や家族が作品の語り手となり、従来のアール・ブリュットの語りとは異なる、創作者へのまなざしと日々の関わりを紹介します。



B：「困りごと」「展示」



私たちの支援センターには、創作にまつわるさまざまな相談が寄せられてきました。開所当初は「作品を見せたいが、どのように展示すればよいかわからない」といった相談が中心でしたが、次第に「見せたいけれど、みんなには見せたくない」という揺れる気持ちや、作品販売に関わる権利の悩み、加害性を含む作品の扱い方など、より複雑な内容へと広がってきました。本展 B では、社会福祉法人ロングランの支援員の方々を対象とした WS を通して制作された作品や、相談対応の中で関係が深まり展開していった作者たちの作品を紹介します。ここに並ぶものは、一時的に「作品」として立ち上がりますが、会期を終えると困りごとを含んだ「もの」として日常へと戻っていくかもしれません。



C：「語り直し」「UN Art Brut」



あるとき、出展作者のひとりから、私たちの展覧会の意義にまつわる語りが「感動ポルノ」だと記されたことがありました。作者がそう感じた理由を綴った文章を読みながら、私はひとまとまりにならない感情を抱きました。作者の代わりに作品や展覧会を語ることの難しさは、尽きることのない試みです。私たちの語りは常に断片的であり、その背景には語られない複数の語りがあります。アール・ブリュットは、その定義上、常に第三者によって語られてきました。いわゆる“障害者アート”を評する展覧会の多くが同様の傾向にあります。本展 C では、作者自身が“アール・ブリュット”や“障害者アート”の枠組みを組み替えながら、自らの日常行為を「作品」として捉え直し、語り直す表現に注目し、その考え方と活動を紹介します。



作り手 五井雅人

生年|1997年 在住|新潟県長岡市 所属|社会福祉法人中越福祉会 みのわの里
作品タイトル「かみ細工」



アール・ブリュット展を見て感化された福祉施設職員が、その後、自分の施設に戻り施設の中を眺めた際に、更衣室の床に奇妙な毛が落ちていることを発見。よく見ると結ばれていることに驚き、それ以降、床に落ちている毛を探し集めていた。その後、五井雅人さんが作者だと判明する。時折、職員が五井さんに毛を渡し結んでもらっている。

語り手 | 角地智史 / アートディレクター

配色や配置により見え方も変わるこの作品。材料に使われているのはなんと…床に落ちた毛髪。繊細な材料は繊細な手つきにより、均一な結び目が次々に生まれていく。

幼少期から続いているというこちらの行動。作り上げられた作品に強い執着はなく、身近な職員へプレゼント。キレイ？キタナイ？モノゴトの見方について考えさせられる作品。

語り手 | 中越福祉会
芸術文化支援委員会



作り手 遠藤哲朗

生年|1962年 在住|新潟県長岡市 所属|中越福祉会みのわの里 更生園
作品タイトル「無題」



ランダムでムラのある貼り方や、時に山のような厚みが生まれるその様子を、支援員の濁川さんは「遠藤さんにしか生み出せない」魅力的な表現として受け止めました。貼り終えた箱は、遠藤さんが自室の引き出しにぎゅうぎゅうに詰め込んで保管しています。濁川さんは、その行為もまた遠藤さんにとっての創作の一部であり、彼のこだわりを象徴するものだと考えています。こうした発想から、濁川さんらが企画したアール・ブリュット展では、この行為を含めて「引き出しごと」公開する展示が行われました。

耳は聞こえず、今は目も見えない。
今の彼が好きなコト、それは美味しい匂いを感じるコト。そして、何かに触れる感覚を楽しむコト。

以前のようにボトルキャップの色分け作業はできないが、キャップに付いているシール剥がしはお手のもの。

その影響が本作品づくりのきっかけにも繋がっている。テープを剥がす順番、貼る場所、貼る順番…

様々な形を手がかりに、本人の感覚で貼り合わせている。



語り手 | 濁川将司 / 生活支援員

作り手 斎藤英雄

生年|1938 - 2010 年 在住|新潟県新発田市



古紙回収に出すために束ねられた新聞紙。それは日付順に積み重ねられ、1か月分ごとにまとめられています。斎藤英雄さんは、新聞の向きを交互に重ねてから自身の上にのせたり重しを置いたりして圧をかけ、形を整えていました。理想とする「思うサイズ」になったところで、独自の方法で結び、仕上げていたといいます。これらの束は階段に積み、一定の量になると、斎藤さん自身が古紙回収に出していました。こうした秩序とこだわりは、新聞に限らず、ごみの分別や掃除など、生活のさまざまな場面に見られたそうです。家族によれば、新聞は曲げたり切り抜

いたりしないと言われており、それを当たり前の習慣として受け入れていたといいます。息子の斎藤英宏さんは、父・英雄さんを「定年まで勤め上げたごく普通の人物だった」と語っています。一方、英宏さんの妻の斎藤千恵子さんは、初めて階段に積まれた新聞束を見たとき、その整然とした姿に「超アート！」だと感動したそうです。英雄さんの死後、千恵子さんが「お寺の作品展 ほとけと私の芸術祭」に出展したことをきっかけに、この新聞束は広く知られるようになりました。



作り手 井口直人

生年|1971 年 在住|愛知県名古屋市長 所属|さふらん生活園
作品タイトル「無題」



街のコンビニと施設のコピー機を使って、自分の顔とその時々気に入ったものを
写し取ることを毎日の日課としている。

ガラス面に顔を押し付け自分でボタン操作し、センサー光の動きと共に身体を動か
すことで、画面に独特の歪みを作り出す。作品中に多用されるシールは、施設での
アルミ缶作業中に剥がした景品応募シールで、これまで何度も当選している。近所
のコンビニには 20 年あまり毎日通っており、終終わると店員が手際よくガラス面
についた顔の痕跡を拭いてくれる。

語り手 | SFRN / アートコレクティブ

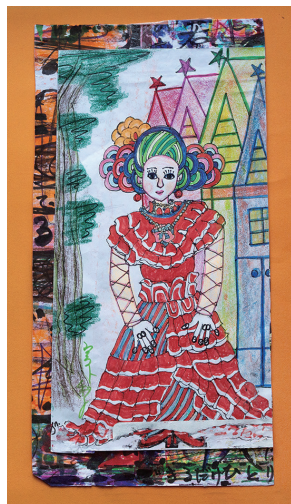


作り手 宮下和子

生年|1948年 在住|新潟県新潟市 所属|信愛病院
作品タイトル「世界の太陽とお月さま」



現在新潟市の信愛病院で入院している宮下さんは、30年以上前から日常的に絵を描いてきました。描き終わった絵は壁に飾っていて、その並べ方も自分なりに決めているそうです。描いた絵について「大切にしたことや工夫したことはありますか?」と聞くと、「大切にしたことはないけど、洋服を工夫しました。心の中に姫様がほしいなと思った。心の中に母がいるけど、誰かいると思って、姫様がほしいと思った。」と答えました。



宮下さんとの出逢いは、今から約2年半前です。私は某支援を行うチームの一員という立場で、ご本人を訪ねました。最初の訪問の時から、私共に自作の絵を十数枚も見せてくれました。その色彩豊かで魅力的な絵に惹き込まれた私は、それまで抱いていた緊張が解けていくのを感じました。それを機に、この素晴らしい絵を多くの人に見てもらいたいと思うようになり、純粹にその一心で、昨年の新潟県障害者芸術文化祭への出展をサポートさせていただきました。月に一度訪問する中で、時には意思疎通が難しい場面もありますが、今や絵は、ご本人と私共の心を繋ぐ大切な架け橋となっています。併せて、宮下さんにとって絵は、社会参加をする上で、とても素敵な武器といえます。

語り手 | 吉田智代子 /
新潟市社会福祉協議会

作り手 本間美喜子

生年|1942 年 在住|新潟県村上市 所属|村上岩船福祉会あかね寮



3 歳の頃から聴覚障害を持つ本間さんは、20 年ほど前からあかね寮で暮らしていて、毎日食事の前や後に絵を描いています。職員の堀さんと姪の川村さんによると、本間さんは手先がとても器用で、耳飾りを自作したり事業所の細かい作業もとても素早くやったりするそうです。

私たちはあかね寮を訪問し、お話を聞きながら実際に似顔絵を描いてもらいました。本間さんは、箱の中から鉛筆を吟味した後、漫画本をばらばらめくり、あるコマの人物の似顔絵をさらさらと描きあげてくれました。職員の堀さんの似顔絵も 10 分ほどで完成させ、差し出された絵は、堀さんの特徴や雰囲気がよく伝わるものでした。



どのような気持ちで描いていると思いますか？

「似顔絵は相手の前で絵を描いているわけではなくて、頭の中のイメージで描いているみたいです。美喜子さんが描く人はわりと決まっている気がしていて、気に入ってる方も描くけれど、むしろ関わりが難しい人のことも描いているような……。なんというか、思いを伝えたいのかなって。普段感情がたいらな方で、なんでも『わかったよ』って言う方なので、絵の中では心に何か溜まっているものを出しているのかな。」

語り手 | 堀梢 / 支援員



作り手 西須奈津子

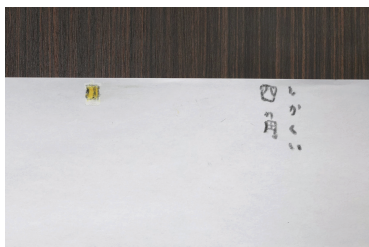
生年|1991 年 在住|新潟県柏崎市 所属|社会福祉法人ロングラン

作品タイトル「彼女の「日課」と「変化」と「癖の強さ」。そして我々にとっての宝物。」



グループホーム（以下、GH）で生活する彼女は毎日就寝前のひと時に絵を描いている。はじめは大好きな「アンパンマン」。ある時、宿泊支援員が自分の絵をリクエストしたことから宿泊支援員の絵が加わった。どれも同じに見えるが本人にはわかるらしい（たぶん…以前聞いたら答えていた）。毎日 4~5 枚の A4 のコピー用紙に描き、たまった絵をドサッと GH の支援員が私へ持ってくる。

描く絵に執着のない彼女は、すぐゴミ箱に入れてしまうので「捨てるなら私へ」と伝えていた。



それから、「こんなに溜まってました〜!」とにこやかに私へ持ってきてくれる。絵を見ると他に違うシリーズが…。用紙の片隅に小さく描かれた四角、チーズ、ピスタチオなどなど。どんなに余白があろうと 1 枚に一つ。ここ（余白）にも書いたら？と声をかけても「はい」と言うが描くことはない。この癖の強い書き方がなんとも彼女らしい。彼女がこれからどんな絵を描くのだろう、支援員との関わりも含めて変化が楽しみである。癖の強さは変わってほしくないが…。

語り手 | 石塚紀子 / 支援員



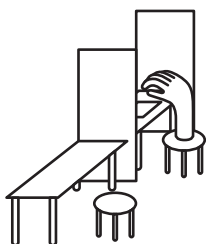
作り手 大橋加奈

生年|1996年 在住|新潟県柏崎市 所属|社会福祉法人ロングラン
作品タイトル「作業用おぼん」



加奈さんは就労支援作業所に通っていて、日中は作業や創作活動をしています。画用紙やホワイトボード、机などに好きな絵を描いていたのですが、作業をする際にお盆を使うようになってからお盆に絵を描くようになりました。お盆は作業のときにしか使用しないため、まわりにペンなど置いていないはずなのに、急に絵が描いてあるお盆があったときにはみんなびっくりしました。どうやら支援員に隠れて描いていたようです。現在は休憩時間にこっそりと描いています。

語り手 | 横山留美 / 支援員



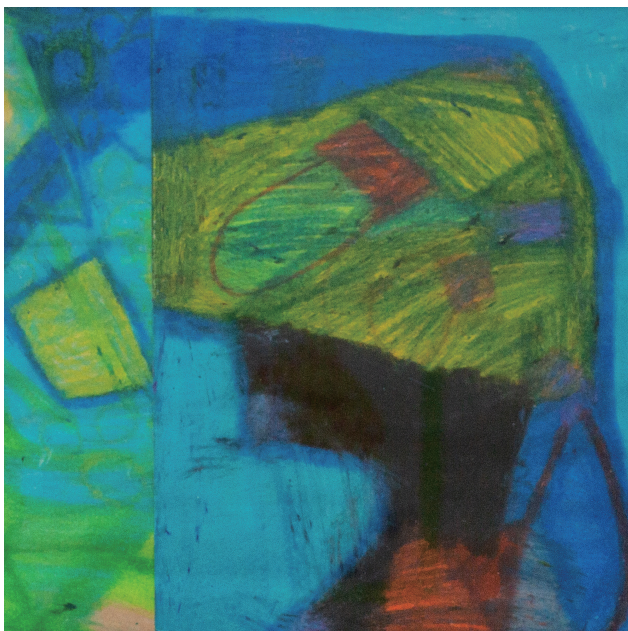
大橋さんとの間で印象的だったやりとりはあったりしましたか。

「私は、1年目の時に。加奈さん大きい声が出るし、ばんばんしたりするので、正直怖いなっていう時期もあったのですが、何度か関わる中で加奈さんに慣れてきて。慣れてきた時に、なんかある時髪切って出社したときに。髪チヨキチヨキしたって言うてくれて。それがすごく、ああそんな見えてるんだって。

ちよっと嬉しくなったなっていうのがあります。」

作り手 今井清和

生年|1980年 在住|新潟県長岡市 所属|新潟県コロニー白岩の里
作品タイトル「清和と海」



色とりどりのクレヨンを使って、すみずみまでカラフルに塗りつくされた画用紙。決まったモチーフはなく、毎回ランダムにクレヨンを選んで描いているそうです。そのときの気持ちによって使う色が違うのではと職員さんは話します。

長岡市寺泊地域にある、入所施設コロニー白岩の里。今井さんはここに20年以上暮らしています。広い敷地内の建物と建物をつなぐ長い廊下には、利用者の方々が描いた絵が飾られています。今井さんは毎日クレヨンと画用紙を持ち歩いており、食事と入浴以外の時間はほぼ絵を描いて過ごしているそうで

す。画材がなくなると落ち着かなくなってしまうため、なるべく在庫を切らさないように気をつけているとのこと。描き終えた絵には頓着がないようで、展覧会に絵が出品されたり、賞をもらったりしても、特に気にする様子はありません。「清和と海」という作品は、当時の担当の職員さんがタイトルを決め、別の職員さんが額に合わせて2枚の絵を貼り合わせています。訪問に伺ったコロニー白岩の里の高台からは、寺泊の海が見えました。



作り手 藤原純治

生年|1984年 在住|石川県金沢市 所属|社会福祉法人松原愛育会 愛育学園



紙に文字が書いてあります。画材などは特に選んでいないようです。ペンや鉛筆などがあり、紙があれば書いておられます。施設で行われている美術教室 Hart の時間には誰よりも早く来て、興味のある情報をスタッフに依頼し、入手します。興味のある題材は、企業の住所や電話番号、日本地図など。それを片手に、ものすごいスピードで書いていきます。速すぎて何を書いているのか追いつけないのですが、間違いなく文字を書いています。

衝動的に書くこともあります。例えば、彼の苦手な不穏な言葉や強い口調に直面した時に、その気持ちを紙にぶつけている様です。書いた紙を支援者に渡すときに自分の気持ちを口頭で伝えたりもします。興味のあることを書くことから、自分自身の気持ちを吐き出すようなものへと、内容に広がりを見せている様です。



語り手 | 山田和子 / 生活支援員

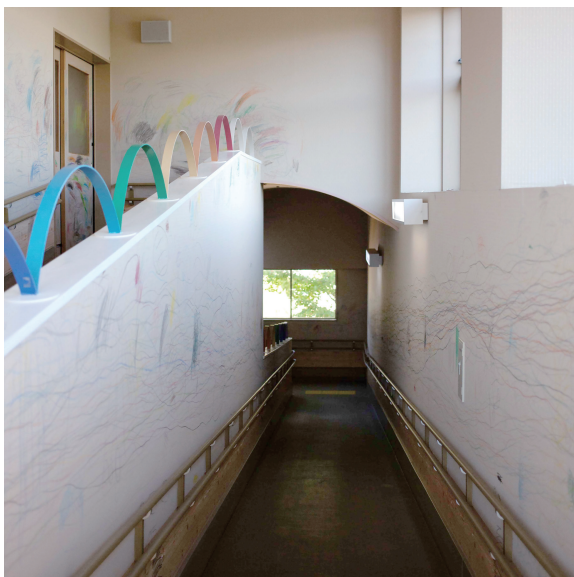


私は、アートという概念を深くわかりませんが、「アート」と言われるものは作家が表現しそれが形となり、見る者の心を揺さぶるものと考えています。私は、障害のある方の表現活動を20年近く支援させていただいていますが、知的に障害のある方は、その思いや考えを上手く言葉で表せないことが多いです。だからこそ、言葉以外の方法で生き生きと表現されるものには、その完成度や技術が高くはなくとも、メッセージや気持ちがとても強く込められている気がします。今回、作家自身がこれはアートであると定義することはないので、ただそこに表現したいものが、またすぐに表現したいものを、また思いいます。それを見て、受け取り側である私の気持ち揺さぶられ、さらに知りたいと感じています。だから、私は本作品を「アート」と言っています。いいのではないかと思います。

これはアートでしょうか？

作り手 Y・K

生年|1966年 在住|新潟県新潟市 所属|十字園、生活介護事業所あつぷる
作品タイトル「家族の風景」



雑然と様々な色で書かれた直線や曲線が朝日に照らされて、まるで異世界の色彩のように十字園の廊下を彩っている。色彩を紡ぎだした彼女は、今十字園に住んでいる。姉と一緒に。十字園に来る前は、父と姉と彼女の3人暮らしであった。ある日、庭の手入れをしていた父が倒れ、帰らぬ人となった。状況を理解出来ない姉と彼女は布団に横たわった物言わぬ父の横でいつまでも座り続けていたそうだ。

父は、知的障がいのある姉妹の手をひいて、夕暮れの自宅周辺をよく散歩したそうだ。夕日の色、町の建物、父の顔、姉の顔、家族3人で過ごした日々は、本人の中で今も色褪せていないのだろう。

何も分からない自分はただの落書きと思い、壁紙の修繕を考えていた。彼女と時間を多く過ごし、心通わせている職員が教えてくれた。これは、彼女が住んでいた街の絵で、父の車、住んでいた街並み、職員の顔、姉の顔全てに意味があり、彼女が... 歩んできた思い出なのだ。

様々な色で描かれたのは異世界ではなく、彼女の歩んできた人生で現実世界。明瞭な発語は難しい、記憶も時系列とは言い難い、だが、十字園の廊下には、確かにそこにあった家族の暮らしが描かれているのである。

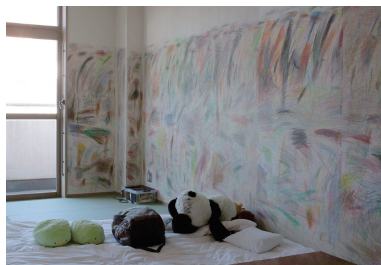
語り手 | 南波龍太 / 支援員

【相談】

施設の壁に描かれた大きな絵を、張り替えなくてはならない。何かの形でこの作品を残すことはできないだろうか？

お父さんが亡くなったことで十字園に暮らすようになったんですが、最初は作業場や自分の部屋で紙に絵を描いていて、職員にあげたりしていました。そこからコロナ期間に濃厚接触者になって別の部屋にいた時に、退屈だったのか自由だったのか、急に壁一面に描きだしたんです。

ここに描いちゃだめだよって言っても伝わらなくて。自分が「描きたい」と思ったところに描いてしまうので、代わりにボードを買ったんですが、書き心地が悪かったのか描いてくれませんでした。止められなかったというか、消すこともできないくらい広がっていきました。

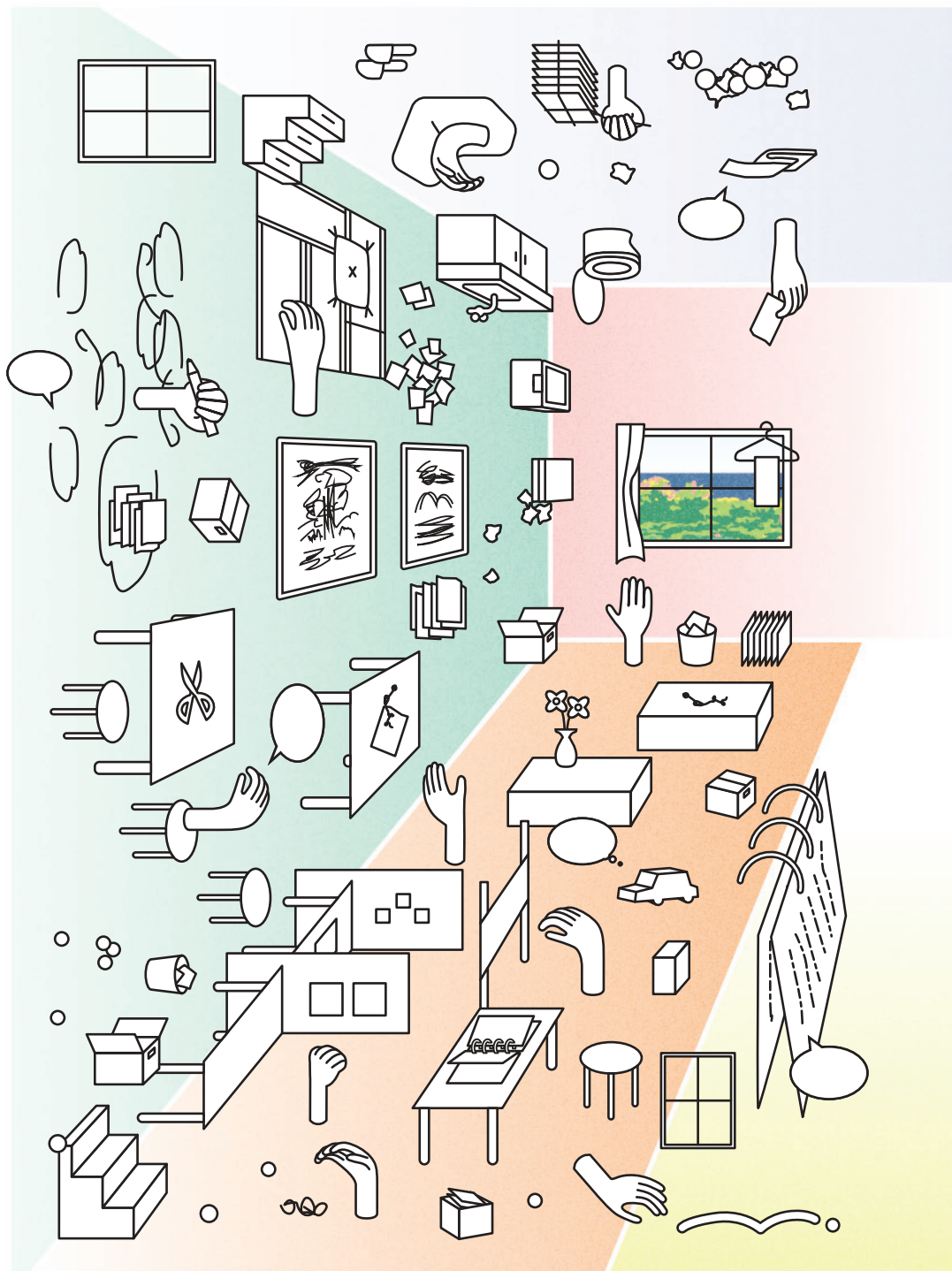


最初は何を描いているのか全然わからなかったのですが、お父さんが亡くなってすぐ、お家を見たいというので、お姉さんと一緒に家を見に行ったことがありました。その時、停まっていた青い車を K さんがずっと触っていたんですね。それを見て、描いていた青い絵が「お父さんの車」なんだと分かったんです。

想像力が必要な時はしょっちゅうあります。十字園の利用者さんは言葉でコミュニケーションがとれない方も多いのですが、その方なりに表現をしていると思うので、K さんの絵のときのように、逃さずキャッチできるように…時間はかかりますけど、私はあきらめたくないと思います。



語り手 | 高橋保江 / 支援員





作り手 岡田清和

生年|1968年 在住|新潟県妙高市 所属|妙高市障がい者アーティストを支援する会
作品タイトル「コロニーにいがた白岩の里」



生まれながらに聴覚障がいと知的障がいがありながらも、「神様からの才能」と評された類い稀な色彩感覚と繊細な技術で、ふるさとの風景や花、動物たちを生き生きと描いています。

岡田さんのはり絵は、ベニヤ板にデッサンの下書きをし、ポスターを小さく手で5mmほどにちぎって、のりで板に貼って作られるものです。配色は岡田さんの記憶から表現していきます。作品の大きさはさまざまですが、1ヶ月に1～2点位のペースで作品を作っています。これまでに制作された作品の数は約300点を超えています。

語り手 | 妙高市障がい者アーティストを支援する会



作り手 堀井銀次

生年|1998年 在住|新潟県柏崎市 所属|社会福祉法人ロングラン
作品タイトル「木喰仏」



絵を描く活動にあたって特別な指導は受けておらず、紙・画材を自ら選び制作に打ち込んでいる。サインペンを好んで使い、細部まできちんと塗りつぶす作業は丁寧に時間をかけて行っている。絵を描く際は、下書きなど一切せず直線も定規など使わずに描いていく。彼独特の色彩感覚はとても色鮮やかで多くの人の目を楽しませている。

語り手 | 石塚紀子 / アートマネージャー



作り手 坂上ウェルネス工房

生年|1959 年 在住|新潟県胎内市 所属|地域生活支援センターごっちゃ
作品タイトル「思いでの花火」



「ご飯を食べてから作りなさい」と家族に注意されるほど、とにかく作ることが大好きで、保育園の頃からさまざまなものを作っていたという坂上さん。作ったものは友達のように感じていたと言います。42歳のときにビーズで絵を描き始めました。きっかけは、木工作品を作っていた際、同じアパートの住人から音に関する苦情があったことだそう。音の出ないビーズ絵を作り続け、今年で20年。かつて見た景色や想像の風景をモチーフに線画を描き、それに沿って15分ビーズを並べ、15分ボンドが乾くのを待つ——その工程を繰り返して1枚の作品を仕上げていきます。1日に5時間ほど制作に没頭することもあるそうです。影響を受けたアーティストを尋ねると、「やっぱり山下清さんの貼り絵だね」と答えました。人に見てもらいたいという気持ちも、ものづくりの原動力となっていて、作品を作る人も、運ぶ人も、見る人も健康で、笑っていられたらという願いを込めて、「坂上ウェルネス（健康）工房」と名乗っているそうです。



どんな思いで作っていますか。

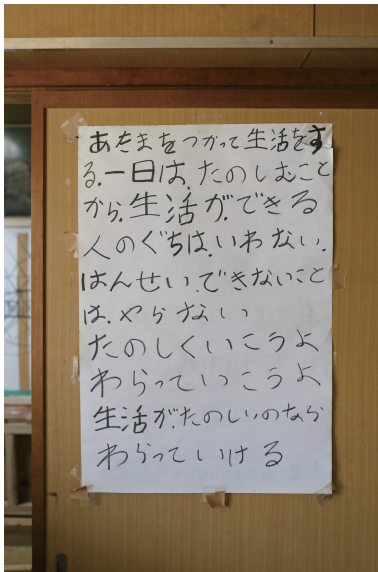


「今度の長岡花火は、その戦争とか災害とか……災害があるからものを作りたいっていうのが私には（あって）。災害っていうのはやっぱり、心の残りとか、心の繋がりとかが、そういうのがあから。花火っていうのは、やっぱり光があって、繋がりがあ。人との繋がりがあ。あけて、バンって言って終わりじゃなくて、やっぱりあけて、その見た花火を、目に残る、うん、何でも目に残す、そういうのがあるから。目に残ったら、見た絵が、見た人が幸せになるかなと思って。そういう思いで、私はこう、このピースを始めた。」



語り手 坂上ウェルネス工房

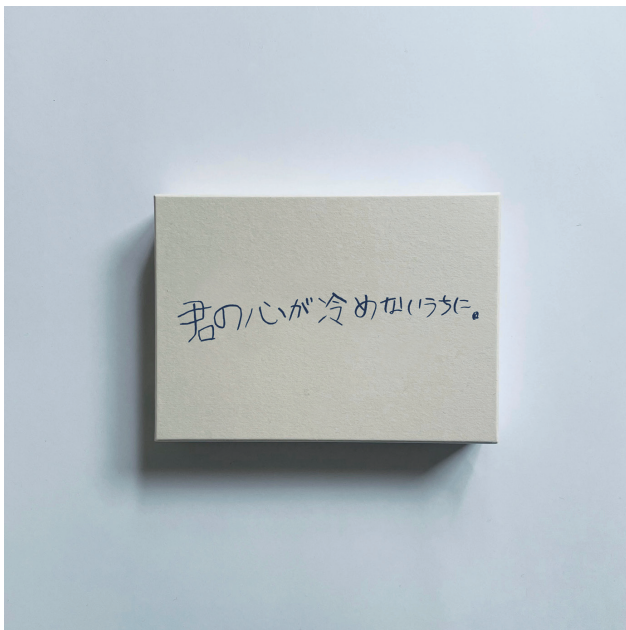
「人の争いに関わりたくはないんですね。前は人の争いがあったから、あんまり関わりたくなくて。どっちなから絵に関わりたくなったの。人の争いよりも、景色の争いとか、そういうのに関わりたくなった。景色の争いだったから自分一人じゃ。自分で納得して自分でつくるってことは、自分一人であるってことは……いいかなと思った。景色が過ぎていって、過ぎていってのに、その景色をつくろうとする。夏のは冬につくる。冬のは夏につくる。どうしてかっていうと、冬に（冬景色は）見た景色そのまんまでしょ。夏になると冬景色、あれ雪ってどうやって積もったかなって。」



作り手 **HAHAHANO.LABO**

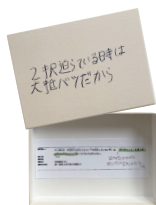
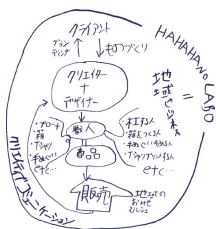
地域 | 静岡県静岡市

作品タイトル「ハハハノハコ」(制作年|2019年-)



「普通」や「平均」というワクにとらわれない人たちの自由で豊かな表現を日常に。〈HAHAHANO.LABO〉は「ハハハなコトをハハハなヒトと」を合言葉に、「オレは障がい者じゃなくて問題のある子。」という息子 (KAN) と、DSO=だいぶしゃべるおばさんが、何か面白いことはいかないか？と周りを巻き込んで始めたプロジェクト。これから何かできないですかね～という実験活動です。

語り手 | 二宮奈緒子 / 母・デザイナー



これまでの言葉の中で印象に残っているものはありますか？

KAN・ありますよ。自分は相手がほっとするようなことを言うのが得意だと思っている。相手が和んでくれたらいいなって。ちゃんとした言葉にはなっていないというか、成立はしていないし、言ってみれば造語なんですよね。なので、言葉の意味とか成り立ち関係なしに、別の使い方してもいいよって。ただ一つ言いたいのは、感動とまではいかなくても、自分の言葉を聞いたことによってほっとしてもらいたい。「君の心が冷めないうちに」という言葉は、自分の中でも沁みているしお客さんにも反応をもらって自分の中でも影響を受けますね。これ実は、当時高校生で映画とかに興味を持っていたので、ある映画のタイトルから言葉を引っ張ってきたんです。それをたまに母親との口喧嘩のあとに出して。

ハハ・私は喧嘩していたのに、彼がコーヒーを出してきてそれを言ったもんだからなんか笑っちゃったんですよね。

語り手—KAN／息子



言葉と日常の出来事がつながっている？

半分は喧嘩ですね(笑) ちょっとした言い合いというか。そういう時、いろんなものがくっついて、思わず感情に任せて言っちゃう。それがなんだろうな、ほんとに感情が動いて出ちゃう言葉が、意外と私に刺さるというか。それで残すようになったんですよね。

私が携帯を出すと「バカ、名言じゃねえからメモするなよ」「残すなよ」って言いながら、結局残して、作品になる。で、それが飾られて誰かがおおってなると、「僕が考えました」って急に言ったりする。注目されるのは嫌いじゃないんですよね。夜寝る前に「頼む、これだけ書いて」って言うのと、「しょうがねえな」って言いながら書いてくれます。

語り手—二宮奈緒子／母・デザイナー



作り手 Ooosu!



結成年|2019年 地域|新潟県柏崎市 主催|社会福祉法人ロングラン
作品タイトル「推し活」

推し展について

社会福祉法人ロングランでは、個々の特性を生かした自己表現（アート）で色々な方達と関わりを持てるようになってほしい、活動から生まれる作品のすばらしさを発信していきたいという思いから、拠点の垣根を越えて「アート活動で社会と繋がる」をテーマに活動「Ooosu!」を有志で行っている。その中で、利用者との活動や関りを紹介する会を設けたところ崇拜するアイドルを語るがごとく熱く語る姿が見られた。他の人では見落としてしまいそうな素敵な行動を「推し」として紹介する企画展「推し展」を開催し、年に2回開催している。「推し」の活動の話を愛おしく話すスタッフを見てスタッフごと愛おしく思うてしまうこの頃である。

語り手 | 石塚紀子 / アートマネージャー



北郷寛奈

生年|2011年

作品タイトル「7つの宝物」



絵を描くのが得意な寛奈さんがいつも必ず書いていたお気に入りの絵…必ず7人いるキャラクターは、彼女のお気に入りアイテムです。他に描くイラストも全て7つ・7人で、欲しいものの数も必ず7つ。工作をしても必ず7つの作品が出来上がります。そんな7つずつの宝物を、自分の活動機の引き出しやよく過ごす場所の床に並べて、時折見返しては「ふふふ」と笑みをこぼします。カラフルで可愛らしい寛奈さんの世界観の魅力には誰もが引き込まれてしまいます。

語り手 | 長束美香 / 支援員

ゆう

生年|2003 年

作品タイトル「彼の法則と解説班」



生活介護通所施設に通っている彼は、毎日スケジュールに沿って活動している。

活動の一つに創作活動があり、その時間に毎日決まって描く絵がある。

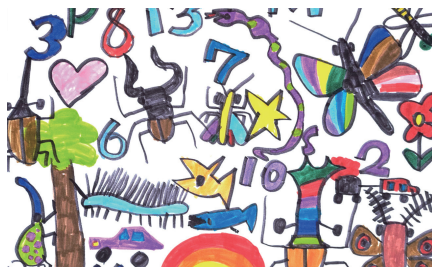
自画像なのか顔の絵を描きその上に多彩な色を塗り上げていく。色選択も重なりも同じようだが日々違っている。暗い色が多い日は気分がすぐれないのかと思うとそうでもなかったりとスタッフにも解説に至っていない。たまに顔と一緒に自分の名前や「おかあさん」の文字も見られることもあるがその他の文字などが隠れているかもしれないとスタッフはわくわくしてしまう。こだわりが強く服装などにも時間をかけて納得いく着方をする彼を考えるときっと何かのルール（法則）がある様にも思える。そんな彼の法則を周りのスタッフはいつ解説し、私のもとに教えに来てくれるか楽しみである。

語り手 | 石塚紀子 / アートマネージャー

荒木結斗

生年|2018 年

作品タイトル「YUTO CAMPUS」



普段は元気いっぱい走り回っている結斗さん！時に乙女な一面もあり、自分の手の爪と足の爪さえもマジックで可愛らしく色付けをしてしまう。そんな結斗さんが、ペンを持つと一転して表情が変わり、まるで別人？と思ってしまうくらいに、何かスイッチが入ったかのように真剣な表情で、小さな体で力強く、スラスラ描いていく。描き始めると時間の流れを忘れるほど作品に打ち込み、トイレに行くことさえも忘れるほどの集中力で、独特な世界観を生み出す。

語り手 | 田中真樹 / 支援員

作り手 MOMO + 佐藤葉月

参加プロジェクト|ものと語りオンライン（主催|新潟県障害者芸術文化活動支援センター）



「ものと語りオンライン」は、「障害のある人の作品」として紹介されることに抵抗があったり制作背景が複雑だったりする人が、公の場では出しづらい表現を限定的に発表できる場です。私自身にとっても、自傷行為や思っていること、考えたことを気兼ねなく表現できる、とても大切な場所。また生々しい、あるいは痛々しい表現をするということは、己と向き合う機会を作る行為でもあります。私ってこんなことを考えているんだ、と向き合ってそれを表現に昇華する行為は心の毒…を絞り出すような、痛みは伴うが浄化されるような不思議な感覚です。私の中にある毒も私の表現の一部としてこれからも撒き散らそうと思います。キラキラした表現の裏側にはドロドロもある。清濁併呑の心を忘れずに。

2021 年から参加している MOMO さんがそれまで作っていた布小物ではなく切り絵を発表した時には、その変化に驚きました。MOMO さんから、切り絵の背景に私の絵が入ったら面白いかもと声をかけてもらって、一緒に作品をつくることになりました。

語り手 | 佐藤葉月



何にもできずすぐはまっても終わってしまう私。そんな中気に入ったのがさいほう。テレビで拝見して、まずはてぬいから。上手にできるようになって、ミシンを買ってもらった。最初はしっぱいだらけの連続だったけど、あきらめずにここまで続けてこられたのは周りの人たちのおかげです。

ものと語りオンラインに参加して、切り絵も始めてみました。細かいところを失敗しないようにつくっています。ものと語りオンラインで葉月さんと切り絵でコラボできたのは良かったです。

語り手 | MOMO

MOMO

生年|2000年 在住|新潟県上越市
所属|医療法人社団三交会 グループホーム三交
作品タイトル「心が休まる時」

佐藤葉月

生年|1984年 在住|新潟県上越市

所属|新潟県障害者芸術文化活動支援センター

作品タイトル「狐火」



狐火

『狐火』

私は近所のスーパーで「狐のおじいさん」を見たことがあります。

コロナ真っ只中にマスクをせず、ボロボロの服（案山子に着せたようなボロボロ感）を着たおじいさんがスーパー内をずっとウロウロしていました。

認知症の方なのかな？そう思っていたら何か違和感を覚え、注意深くみるとおじいさんの目がホンDIGツネの金色の目でした。

怖くなった私は急いでスーパーを後にし、家族にそのことを話すと、弟は「カラコン付けたおじいさんじゃないの」と取り合ってくれませんでした。父は「山が近いとたまに化けて降りてくる奴はいるんだよ」と。

私はあの時おじいさんの動物が珍しい物を見た時のキョトンとした表情、そして金色のおじいさんの目が忘れることができません。

語り手 | 佐藤葉月



作り手 情報資格試験

生年|1983 年 在住|新潟県上越市
作品タイトル「斬られるリアクション」



描き、創り、あらわし、生きる。
多数の資格を持っても満たせないまま
それでもまだ資格を求め、表現を求め
生き方を探る、ヘルプマークを持った表現者
自分の生きる世界をまた今日も生み出す



《斬られるリアクション》

斬りたい。そう思って活動するも、「障害者だし」「万が一、何かあったとき責任が」と暗喩され、まわる役は斬られ役ばかり。ただ斬られてわかることがある。“斬られてあげないと、斬ったことにならない”。斬られるリアクションがあって成立し、斬られないと不成立。このパントマイムの様な世界、ときに鮮やかに散り、ときに目立たずに退く。血しぶきをあげずに色んな惨劇をあらわす。影が強くなれば光も強くなり、結果、主役が引き立つのだ。

語り手 | 情報資格試験

花に見えたり、太陽に見えたり、監視する鋭いまなざしにも見える作品もある。
それは、花と言った瞬間に太陽になれず、
太陽と言った瞬間に花であることを否定される。
発したいのは、受け取る人の経験と感性に働きかけたい感覚もあります。
分かる人には分かってほしい、けれども大々的に「これを見て！これを感じて！」
というのとは違うような。
そこには、発信者からの一意の押しつけではなく——ある物事を一面的にとらえて
決めつけるのではなく——、多面的にとらえて、複数の意味合いや思いがあること
を感じ取ってもらいたい。
そして複数ある、ということと、どちらでもある、という曖昧さや多元的なもの——
これは花だけ、ではない、太陽のみでもない。花であり太陽でもあり、何か他の
ものにも見えるまだ未開のものでもある——そんな発現、それはつまるところ、時
に障がい者になったり、時に障がい者を隠す、どちらでもあって、どちらも含む自
分自身そのもののようにも感じてきます。

またどこかで、きっと解り合えはしないよね、という諦めと、必死にとらえよう・
意味を見出そうとするコトへの馬鹿馬鹿しさのような——ただ感覚のまま、理論や
分析による計算し尽くされた美しさとは別の、直感的、本能的、動物的に、ああ面
白い！お引き込まれる！という、
流していて心地よい、BGM やラジオのような投げかけも孕んでいます。
芸術や美術、その道の専門家への叩きつけ、あなた方がその道にそぐわないものを
DIS としたものへの、UN をつけてお返しするもののような所もあります。

covered; 秘匿された、
dis-covered; でも、中には秘めているモノがあると見つけるも、
un-dis-coverd; それには気付かず（ただの作品展示だね、と）流される
こんな言葉遊びに思いをのせていました。

個展「UNusual Museum # あ・にゅーじゃーみゅーじゃー」レポートブログより一部抜粋

語り手 | 情報資格試験



情報資格試験さんは、資金集めから
企画、運営までを自らの手で行う展
覧会をこれまでに何度か開催してい
ます。2021 年の春には「障がい者の
作品展に疑問を持ちながらそれを問
いかける障がい者・佐藤葉月 / 情報
資格試験による障がい者作品展」と
銘打った展覧会を主催しました。



作り手 七桃団仔

生年|1990 年 在住|新潟県新発田市
作品タイトル「自らの権利は自らが守る」



これらはすべて意図して作成したものではなく、自分の権利を他者から保護する為作ったもの、怒りから生まれたもの、悲しみから生まれたもの等、人生を送る過程で偶然生まれた作品です。

もはや私の憤りは頂点に達して居り、語って居る場合では無い。貴様等健常者は障害者を不当に扱い、隙あらば嘲笑して来る。行政に於ても然り、公権力は私に狼藉も働き、人権をも侵害した。私は相互主義の観点から、時に暴力も辞さず此れ等悪徒と戦う所存である。

《抗議ののぼり》

此ののぼりとメガホンを持ち、某企業に 24 時間態勢で徹底抗議しようと計画したが、我が前(施設の職員さん)に反対され、衝突する事なく和解。作成に至った理由は、其の企業が私の人格を否定したからである。

語り手 | 七桃団仔

【漢文の廃れた理由と漢文の芸術性について】

凡人者 先有言乃有所思 而人之心 由言即知其心
若不可言喻 蓋所屬於類似而已矣

人は言語の上に概念を持ちますが、日々感じる
様々な感情も、言語化できて始めて自分の感情を
理解できます。言語化できない感情は、他の類似
する感情と一括りにされて表現されるのではない
でしょうか。

凡心者 無所窮極 深於海底 小於砂粒 色彩無限
人之心 難尽於辞

人の感情はコンピュータの0と1、電流のONと
OFFのようなデジタルではなく、その中間の階層
が無限に存在し、区切りがありません。言語では
全てを表現しきれないでしょう。

固心難名状也
雖同文之朋 各人解釈不同或不解

言葉に出来ないもどかしさ、筆舌に尽くしがたい
思い、同じ日本語を使っても、読み手によって解
釈が異なったり、理解されなかったり。

言語惟練方便之利 人心何益之有
余好倭語 而古今和歌集序文甚喜矣
曰 夫和歌者 託其根於心地 発其華於詞林者也

機能美だけの言語では、物事を正確に伝える事は
可能であっても、人の心を豊かにはしないでしょ
う。私は日本固有の言語である“やまとことば”も
好きで、古今和歌集の「やまとうたは、ひとのこ
ころをたねとして、よろづのことはとぞなれり
ける」で始まる美しい序文が大好きです。

將來 言語可整齊 而溝通更易哉
但憾失古文之美矣

将来、言語が機能的になり、ムダが無くなり、コ
ミュニケーションがよりしやすくなるよう進化し
ていく事でしょうが、古代言語には存在した美し
さや心の豊かさは失われていくように感じます。



語り手 | 七桃団仔

作り手 しゅんすけ

在住|新潟県新潟市

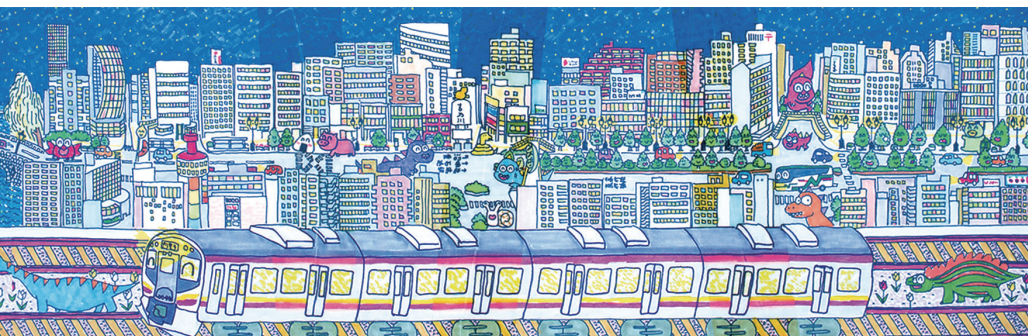
所属|医療法人 水明会 ラグーン



この絵をかいたのがもう大分まえの事で、どんな思い気持ちでかいたのか思い出せなくて、かいてた時の下書きをみて振り返りました。この絵は元々夕方の絵で、どんな絵にするか悩んでかいていたと思います。だから完成した時は凄く嬉しかったのを思い出します。観てくれる人はどんな顔をしてくれるんだろうか。笑ってくれるかな。そんなことを想像してたと思います。この絵は夕方を夜にしましたが、観てくれた人が笑顔になってくれたら嬉しいです。

語り手 | しゅんすけ





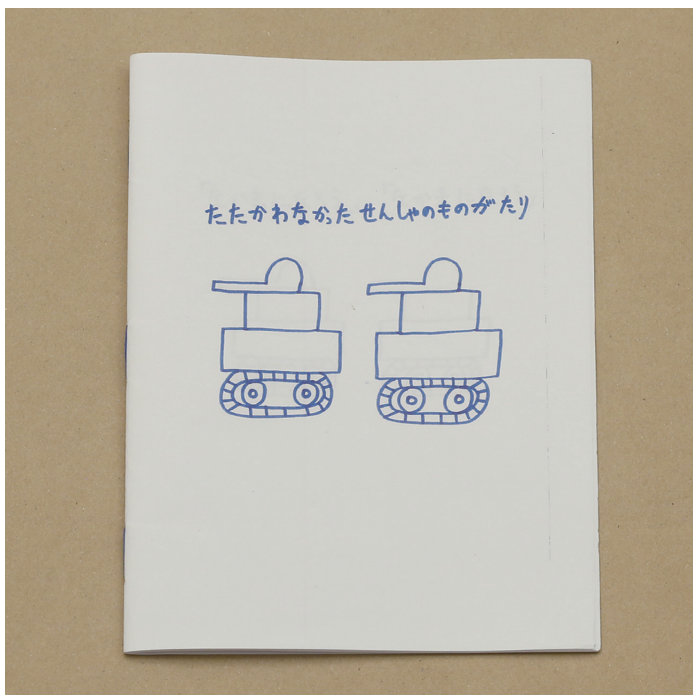
「見る人を喜ばせたい」という気持ちでこれまで数多くの絵を描いてきたしゅんすけさん。数年前、依頼に対して描いた絵の権利を納得できない形で渡す形になってしまって以来、作品としての絵は描いていないといいます。この絵は、障がいを持った人が権利を搾取されないよう、怒りと願いを込めて描いた最後の絵。「今は絵を描く気持ちになれないけれど、いつかまた心動かされることがあれば描くかもしれない」と話しました。



作り手 心は生きる 心と生きる

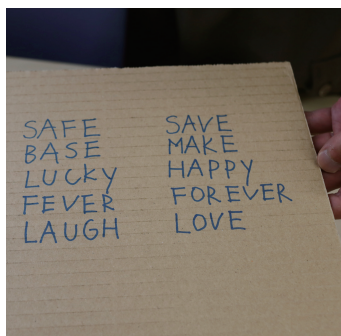
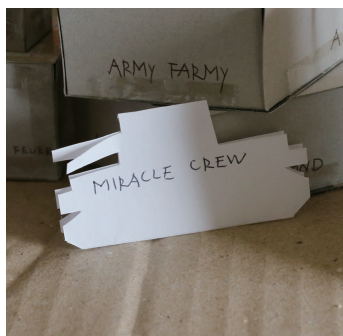
在住|新潟県新潟市

作品タイトル「たたかわなかったせんしゃのものがたり」



小さい頃に、ガンダムに出てくるガンタンクがかっこ良くて好きだったけど、ガンタンクが戦車なのだと知って、戦車がかっこ良いと思った。幼稚園の卒園制作で戦車の絵を描いたら、友達に「ちょうだい」と言われたが、あげられなかった。代わりに、戦車の絵を描いてあげたら喜ばれて、物語があるとよいのではないかとされた。その後、戦車殺人の道具であることが分かって、ショックを受けた。「殺し合いなんて見たくない」「かっこ良いけど、人を殺すのは見たくない」と思った。そこで、「戦わなかった戦車の物語」を制作することにした。作品を見ると、昔を思い出させてくれて、夢の中にも出てきて、それが奇跡と思える。

語り手 | 心は生きる 心と生きる



フリーペーパーとして制作されたこの絵本は、二台の戦車が並び、「なかまになろう」「なかまになろう」と呼びかけ合う挨拶から始まります。“なかまのあいさつ”を発明し、世界を巡った戦車たちは、最後に「しあわせにするよ」「しあわせにするよ」と言葉を交わし、静かな余韻を残して終わります。

この絵本の半分のページは白紙のまま残されています。作者によれば、それはこの作品を受け取った人たちが、その続きを自由に描き加えていけるようにという思いからでした。

2020 年度に行われたアールブリュット展では、この絵本が来場者に配布されました。本展では、受け取った人々によって描き継がれた「たたかわなかったせんしゃのものがたり」を紹介します。



令和7年度新潟県障害者芸術文化活動普及支援事業
新潟アール・ブリュット展 もの語り 2025

会期 | 2025年11月28日(金)-12月7日(日)

開館時間 | 10:00-17:00

入場料 | 無料

会場 | ソフィアセンター柏崎市立図書館（〒945-0065新潟県柏崎市学校町2番47号）

同時開催 | 障がい者芸術作品展「かしわざきギャラリー」（柏崎市、刈羽村 主催）

主催 | 社会福祉法人ロングラン、新潟県障害者芸術文化活動支援センター

東海・北陸ブロック障害者芸術文化活動広域支援センター

後援 | 柏崎市、刈羽村

特別協賛 | 株式会社ブルボン

企画演出 | 角地 智史

空間演出 | 小出 真吾（IDEKO）、ワタナベメイ

運営事務局 |

新潟県障害者芸術文化活動支援センター／坂野健一郎、佐藤葉月、渡辺智穂、井上有紀

社会福祉法人ロングラン／西川紀子、石塚紀子

展覧会調査報告担当者 | 長澤慶太

協力 |

社会福祉法人中越福祉会、社会福祉法人さふらん会、社会福祉法人村上岩船福祉会

社会福祉法人松原愛育会、社会福祉法人長岡福祉協会、医療法人青山信愛会

社会福祉法人更生慈仁会、株式会社 FIB、妙高市障がい者アーティストを支援する会

一般社団法人みらいず、医療法人三交会、医療法人水明会

医療法人社団ささえ愛よろず

【参考文献】

・小寺里枝「〈アール・ブリュット〉の初期構想—1940～50年代、ジャン・デュビュッフェの芸術理念—」第66回美学会全国大会若手研究者フォーラム発表報告集、pp.143-154（2016年3月）

・角地智史「令和4年度新潟アール・ブリュット公募展「もの語り」ガイドブック」社会福祉法人みんなでききる、p.2（2023年3月）

新潟アール・ブリュット展 もの語り 2025 資料

展覧会写真 作者情報一覧



2025年11月発行

企画・編集 | 新潟県障害者芸術文化活動支援センター

発行責任者 | 大島誠

デザイン・イラスト | ワタナベメイ

作品調査・編集 | 角地智史、井上有紀

写真 | 角地智史 他

発行 | 新潟県障害者芸術文化活動支援センター

(社会福祉法人みんなでいきる 法人本部内)

〒943-0834 新潟県上越市西城町2-10-25-101

TEL | 025-530-7264 FAX | 025-530-7261

E-mail | info@niigata-artbrut.net

URL | <https://www.niigata-artbrut.net/>



